

再び活動服に袖を通し、決意を新たにしている熊谷さん



地域の安全を願い 再び消防団員として活躍したい



くまがい よういち
熊谷 陽一さん (63 歳)
中村在住

金ケ崎町消防団員。平成5年に消防団へ入団。班長、部長を歴任し令和3年に退団。同年に消防支援団員として活動し、本年4月に消防団員として復帰。趣味は25年以上続けているアコースティックギター。母と2人暮らし。

「所属部の団員数が少なく、支援団員ではなく、基本団員への復帰が必要と感じた。仲間と苦楽を分かち合う楽しさや地域貢献への思いもあり、再び消防団員として活躍したい」

4月から支援消防団員から消防団員へ復帰する陽一さんは、消防団への熱い思いを口にする。平成5年に地域の人達から声を掛けられ、入団を決意。本業の自動車関連の仕事に精を出す傍ら、消防団の活動に積極的に取り組んだ。丁寧な仕事ぶりで周りからの信頼も厚く、長く班長や部長として地域安全のために汗を流した。他の団員に復帰すると話した時は、とても歓迎され、嬉しかったという。

平成7年12月に金ケ崎駅付近の火事で工場が全焼した際には、真夜中に防火水槽に懸命に給水したことが強く印象に残り、火災の怖さや大変さを学んだと話す陽一さん。部内でも人間関係や和を大切に、自身の経験を踏まえ後進育成にも力を入れている。「地域や各自治会と連携を図り、消防団員を確保し、地域で協力して防災へつなげたい」と思いを語る。現在は防災に対するニーズが変化し、防災に関する情報が得やすくなったことは良いことであり、普段使用する消防車両性能の向上も意欲につながると話す。

「消防団は災害を最小限に防ぐことが使命。災害対応の最前線に立ち、地域貢献をしているので、大変なことも多いがやりがいには代えがたいもの。そして大切な仲間もできる。素晴らしい金ケ崎をこれからも守れるように、頑張って活動していきたい」と思いを込めた。

※消防支援団員・・・後方支援を目的として、火災などの災害に限り出動する消防団員のこと

広報日記



「ぽかぽか」「ぐんぐん」春になるとよく聞く言葉である。春の柔らかな日差しや若葉が成長する様子が想像される。新しい生活が始まる人は「うきうき」する心境であろう。最近であれば「むずむず」という言葉を聞けば、花粉症の人が辛いのだろうと思われる。物事の状態や動き、音や声を言葉で表す『オノマトペ』は言葉を補足でき、相手にもイメージしてもらいやすい。脳が活性化されてやる気が出る効果もあると言われている。広報紙の中ではあまり馴染みがないが、一つの表現として添えたい日本語だと思っている。

取材に行った際もみなさん「にっこに」しながら答えていただき、「わいわい」している場面を写真に収めている。広報担当2年目の私も良い広報紙を作れるように「どんどん」技量を上げていきたい。(千葉)

3月31日現在

人口と世帯

※()内は前月比

人口	15,085人	(△ 2)
男	7,775人	(+ 21)
女	7,310人	(△ 23)
世帯数	6,549世帯	(+ 55)